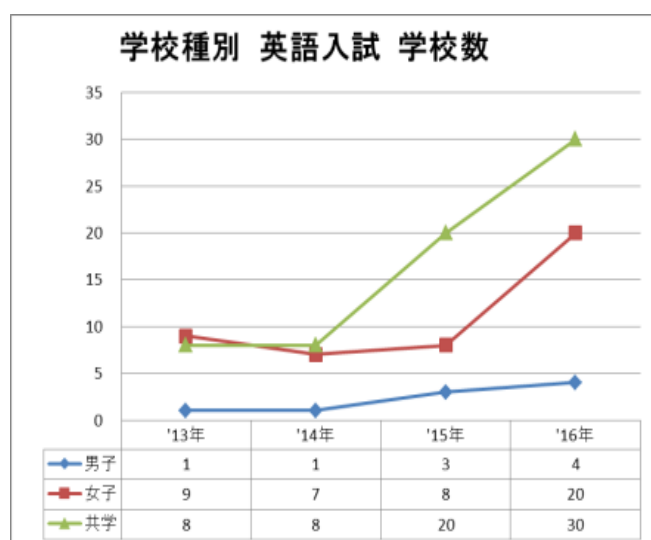


入試科目変更点からわかる、グローバル教育の現状

2017年度中学入試の変更点を分析すると、英語入試と思考力・判断力・表現力を評価するテストが多いことが分かりました。変更点のある学校20校のうち、入試科目に関するものが15校で、15校の内13校が英語入試または思考力・判断力・表現力に関連する入試でした。ちなみに、2016年度中学入試の変更点を確認してみると、変更点のある学校22校のうち、入試科目に関するものが7校あり、その内4校が英語入試または思考力・判断力・表現力に関連する入試でしたので、9校も増えていることが分かります。グローバル教育に対応するための改革として英語力や思考力・判断力・表現力のテスト（適性検査と類似点が多いテスト）に注目している学校が急増しているようです。

【英語入試を採用する学校は2015年から急増】

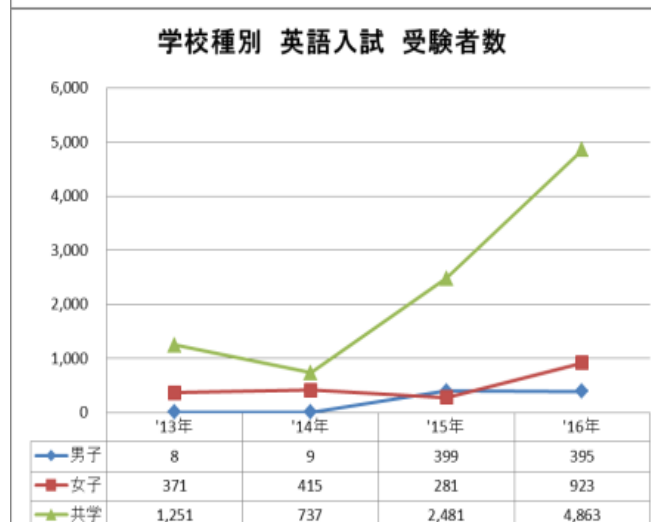


英語入試の実施状況を調べてみました。「グローバル入試」という名称の入試は2015年から見られるようになってきました。2015年から、帰国子女以外にも英語入試を行う学校が急増しました。左記の英語入試の学校数のグラフを見ると、共学校が2014年～2016年で最も多く、共学校、女子校、男子校の順に多いことが分かります。特に、2015年には共学校が、2016年には女子校が急激に増加しています。

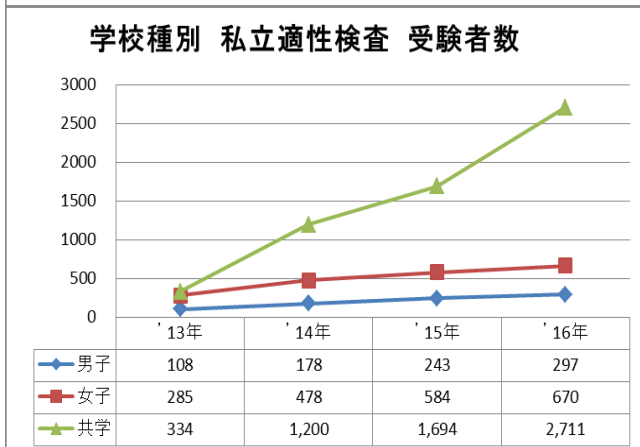
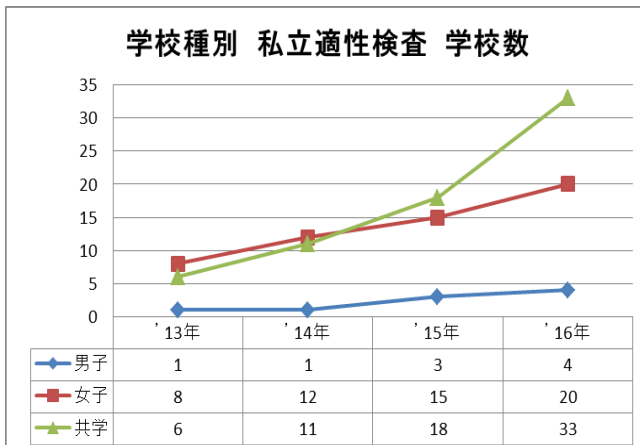
英語入試の受験者数のグラフを見ると、共学校が最も多く、女子校、男子校の順となっています。2014年は共学校で減少しましたが、女子校と男子校では微増でした。

女子校は受験者総数が少なく、学校数は多いことから、学校ごとの受験者数は少ないことが分かります。

今は、受験者数が少ない女子校でも、小学校で英語を本格的に指導するようになれば、受験者数は増えると思われます。



【適性検査を採用する私立中学も同じ傾向】



グローバル教育で、英語は重要なコミュニケーションツールですが、思考力・判断力・表現力のある生徒を採用するためには、**適性検査が最もふさわしい入試**ではないでしょうか？

英語入試と同じように、適性検査を採用した学校数と受験者数を、学校種別（男子校・女子校・共学校）に分類してグラフを作成しました。適性検査を実施する学校は、共学校・女子校が多く、男子校は少ないことは共通しています。また、2015年から2016年にかけて学校数が急増したのは共通していますが、2013年から2014年の時点でも適性検査を採用している学校は多く、英語入試はまだ少ないところが異なります。

受験者数についても、英語入試と同じように女子校の受験者総数は少なく、学校数は多いことから、学校ごとの女子校の受験者数は少ないことが分かります。

私立中学では、明らかにグローバル教育に力を入れる学校が増えており、入学させたい生徒についても従来の学科試験ではなく、英語入試や適性検査で、グローバル教育に適した人材を求め始めたことが分かります。グラフで、推移を見てもわかりますが、学校数と受験者数は指数関数で増加しており、今後この傾向は、さらに顕著となると思います。